

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 梁 辰

論 文 題 目

日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者および非  
学習者の日本語アクセント知覚 ―日本語の学習経験が日本  
語アクセント知覚に与える影響について―

論文審査担当者

主 査

名古屋大学 教授 成田克史

委員 名古屋大学 教授 大名 力

委員 名古屋大学 教授 鹿島 央

(国際言語センター)

委員 名古屋大学 准教授 加藤高志

# 論文審査の結果の要旨

## 論文審査の結果の要旨

### 1. 本論文の構成と概要

本論文は、日本語母語話者と、日本語の学習者である中国語母語話者と学習経験のない中国語母語話者を対象に、日本語の学習経験が中国語を母語とする日本語学習者の日本語アクセント知覚に影響を与えるか、与えたとすればどのような影響を与えるかを解明したものである。

第1章では、研究の必要性と、中国語、日本語ならびにその母語話者の定義を述べている。

第2章では、日本語のアクセントと中国語の声調の共通点と相違点について述べ、普通拍からなる2モーラの日本語のアクセントを中国語の四声と対比し、LHはT3 + T1に、HLはT1 + T4に近似するが、後者に比べて前者における違いがより大きいことを指摘した。

第3章では、成人の未習得言語または第二言語の知覚に影響を与える要因と、その仕組みを体系的に説明する、知覚同化モデル (Perceptual Assimilation Model, PAM) と、音声学習モデル (Speech Learning Model, SLM) について、それぞれの主張をまとめ、両者が互いに競い合う関係ではなく、補い合う関係にあることを示した。

第4章では、これまでの言語声調の知覚研究についてその成果を俯瞰し、PAMとSLMを言語声調の知覚研究に応用する必要性について述べた後、日本語アクセントの知覚研究、とりわけ中国語を母語とする日本語学習者を対象とした日本語アクセントの知覚研究について述べた。

第5章では、本研究が従来のような中国語を母語とする日本語学習者のアクセント型別の正答率にとどまることなく、日本語アクセント知覚に基づく語の同定処理を検討し、日本語の学習経験が日本語学習者の日本語アクセント知覚に影響を与えるか、与えたとすれば、どのような影響を与えるかを明らかにすることを研究課題とすることを述べた。

第6章は、冒頭に挙げた3群からなる実験協力者を対象に、アクセント型によって弁別される2組の語（「垢」と「赤」、「麻」と「朝」）を用いて行った両耳分離聴検査法による同定実験（実験1）の詳細である。実験の結果、日本語学習者と日本語の学習経験がない中国語母語話者との間では、正答率または反応時間に有意差が検出され、日本語の学習経験が中国語を母語とする日本語学習者の日本語アクセント知覚に影響を与えることが示唆された。その一方で、日本語学習者と日本語母語話者との間では、正答率にも反応時間にも有意差が検出されず、日本語学習者は日本語の学習を通じて、日本語の概念化された高さ範疇を習得しており、日本語アクセント知覚に基づく語の同定処理が求められる場合、母語の高さ範疇（声調）ではなく、習得した日本語の高さ範疇を用いて語の同定処理を行うことが示された。

第7章では、実験2と3に用いる刺激について、まず、範疇知覚を明らかにするための同定実験と弁別実験の際に生じる「端点の正規化問題」について述べ、本研究における端点の選定方法と端点の正規化修正の方法について述べた。次に、正規化修正を経た端点のピッチ曲線から作成した2つの刺激連続（akaの刺激連続とasaの刺激連続）の音響的性質とそれに対する自然度評価試験の結果について述べた。

第8章は、日本語学習者が習得した日本語の高さ範疇が母語話者のものと同一といえるかを検証す

## 論文審査の結果の要旨

るために行った範疇知覚を明らかにするための同定実験（実験2）の詳細である。

この実験では、第7章で作成した2つの刺激連続上の刺激語を無作為に配列し、実験協力者に聞かせ、実験協力者群別の音韻境界値と、個々の刺激語が LH（「垢」、「麻」）または HL（「赤」、「朝」）に同定される割合を明らかにした。その結果、日本語学習者は日本語非学習者と日本語母語話者に比べて、音韻境界値が HL 側に偏ることが示唆された。

音声学習モデル（SLM）に基づき、このことは、LH は日本語の学習によって新たに構築された高さ範疇であり、母語の T3 + T1 と異化されるのに対して、HL は母語の T1 + T4 と同化され、合併された高さ範疇であることに起因するという仮説を示した。

第9章は、実験2に見られた違いが範疇知覚を明らかにするための弁別実験にも反映されるか、反映されるとすれば、それはどのような違いかを明らかにするための実験3の詳細である。

この実験では、第7章で述べた2つの刺激連続上にある刺激語を1つおきに組み合わせた弁別ペアを実験協力者に聞かせ、実験協力者群ごとの各弁別ペアにおける弁別正答率を集計した。その後、実験2で得られた実験協力者群ごとの各刺激語の同定状況と比較し、その結果、日本語学習者の音韻空間においては、LH と HL が対等の2つの高さ範疇として存在しており、日本語母語話者のアクセント核の探索に重点を置く知覚様式とは異なることが示された。

第10章は、本研究の結論（第6章、第8章、第9章参照）と今後の課題である。

## 2. 評価

本論文には次のような学術的貢献が認められる。

- (1) 従来、日本語学習者のアクセント習得研究では、単にアクセント型別の正答率を記述することが多かったが、本研究では、アクセント知覚の問題に、語の同定処理というより大きな枠組みの中で取り組んでいる。
- (2) 実験は周到に準備されている。刺激語をすべての実験協力者にとって親密度の高い少数の語に限定し、語の親密度の差が結果に影響を及ぼすことを回避するという賢明な方法を考案し、採用している。また、刺激語作成のための録音音声の再合成に先んじて、原音声に正規化処理を施し、自然度の高い音声を得ている。
- (3) 実験を通じて次の知見が得られた。1) 中国語を母語とする日本語学習者（以下、学習者という）は、アクセント知覚に基づく日本語の語の同定課題において、母語の高さ範疇（声調）ではなく、習得した日本語の高さ範疇を用いて語を同定している。2) アクセント判定が LH（低高）から HL（高低）に切り替わる音韻境界が学習者では HL 側に偏るという点で日本語母語話者（以下、母語話者という）と異なる。3) このことは、James E. Flege が提唱する音声学習モデルに基づき、LH は日本語学習によって新たに構築された高さ範疇であるため、母語における声調の組み合わせ T3 + T1 から異化されるのに対して、HL は T1 + T4 と同化されるためであると説明できる。4) 学習者では、音韻境界を挟む刺激語対の弁別力が高く、共に音韻境界のどちらか一侧に位置する刺激語対の弁別力が低いものに対して、母語話者では、LH 側に

## 論文審査の結果の要旨

位置する刺激語対の弁別力が高く、HL側に位置する刺激語対の弁別力が低いという違いが見られる。5) このことは、学習者にとって、LHとHLが2つの対等な高さ範疇として存在するのに対して、母語話者にとっては、HLにおけるピッチの下降がアクセント型の有標のマーカであり、その検出に至るまでは弁別力が高く維持されるということにより説明できる。

こうした学術的貢献が認められる一方、本論文には次のような問題点が含まれている。

- (1) 実験協力者の母方言を統一したというが、出身地によってアクセント様式が異なる可能性があり、精査が必要である。また、人数が十分であったか、さらなる検証が求められる。
- (2) 刺激語が2モーラの語に限られており、より長い語におけるアクセント型の弁別・同定の方略については別途研究する必要がある。
- (3) 語の単独発話を用いているために、そのピッチパターンに句音調が影響していることも考えられ、また、実際に刺激語を句に埋め込んで実験すれば結果が異なったかもしれない。
- (4) 日本語のLHまたはHLアクセントの弁別・同定課題ではあるが、実験協力者は必ずしもピッチの上がり下がりだけでなく、母音開始前の声門閉鎖などの余剰的特徴を含めて判断している可能性がある。

しかし、こうした問題点は本論文の価値や独自性を損ねるまでのものとは言えず、本論文はそれらを十分に上回る学術的貢献を含んでいる。

### 3. 判定

以上のような審査の結果を基に、本論文は博士（学術）の学位に値するものと判定する。